

2017年5月27日

歴史都市防災研究所定例研究会

宮城県南三陸町志津川地区の祭礼を 事例とした「記憶地図」調査の 経過報告

谷端 郷・板谷直子・中谷友樹

プロジェクトの概要

- 歴防のプロジェクト、歴史文化都市の「記憶地図」に関する研究の一環
- 科学研究費・基盤研究C「地域の文化遺産が被災後の復興に果たす役割に関する研究」（研究代表者：板谷直子）
- 宮城大学事業構想学群平岡善浩教授の研究室
- 立命館大学大学院文学研究科院生

視点

- 建造環境の復興に対して、地域が培ってきた祭礼や文化活動の復興
 - それらが執り行われてきた「場所の再生」が重要である（相澤2005）
 - 津波によって場所や景観は失われてしまっており、被災前の地図や記憶を頼りに祭礼に関わる場所を抽出
 - 地図に落とすことによって祭礼に関わる場所とその意味を把握
- 「記憶地図」

研究の位置づけ

○記憶のアーカイブ化の一手法「記憶地図」

- ヒロシマ・アーカイブ（ヒロシマアーカイブ政策委員会2015）
- 戦争体験・戦後の生活（赤石・福島・矢野2015）
- 過去の祭礼景観の復原（矢野・佐藤・河角2017）

→失われてしまった過去の景観の復原

→GISベース

○とくに地図を用いた記憶のアーカイブ化による復興支援

- Japan Disasters Digital Archive（ハーバード大学、プラットフォーム）
- トポフィリアプロジェクト（東北学院大学2013、消滅する集落）
- 「街の記憶ワークショップ」（槻橋ほか2013、グリーンワーク・復元模型）

→失われてしまった景観の復原

→記憶を活用した復興支援の模索

⇒GISベースの「記憶地図」を活用した無形文化遺産の復興支援

本報告の目的

「記憶地図」の分析と活用可能性の検討

- ・「記憶地図」に何が描かれているか？
- ・「記憶地図」はどのように活用されたか？

→「知識」（祭礼に関わる情報）の継承という側面から持続可能な祭礼継承のあり方についても若干考察

「記憶地図」 調査第1弾の概要

目的：震災前の祭礼の実態把握

日時：2014年8月26～28日

聞き取り対象：志津川地区の五社（上山八幡宮の宮司が兼務）

- ・ 工藤祐允（上山八幡宮宮司）、工藤真弓氏（上山八幡宮禰宜）
- ・ 吉田功氏（上山八幡宮世話人）
- ・ 遠藤紀安氏（保呂羽神社役員）
- ・ 星みよこ氏（古峯神社元会計担当）
- ・ 久保田逸雄氏（荒嶋神社別当）
- ・ 川村由幸氏（西宮神社別当）、工藤清徳氏（西宮神社責任役員）

調査参加者：

- ・ 立命館大学：板谷、谷端、前田
- ・ 宮城大学：平岡、遠藤、庄司
- ・ ウェスリー・チーク氏

「記憶地図」 調査第2弾の概要

目的：記憶地図の進化を目指して、地域に伝わる言い伝えや地名の由来の把握

日時：2015年8月17～19日

聞き取り調査

- ・ 工藤真弓氏（上山八幡宮禰宜）
- ・ 鈴木卓也氏（南三陸ネイチャーセンター友の会会長）
- ・ 仲松敏子氏（しづがわ民話の会、語り部）
- ・ 後藤一磨氏（南三陸町戸倉、農漁業）
- ・ 阿部清敬氏（元歌津中学校校長）

調査参加者：

- ・ 立命館大学：板谷、谷端、佐藤
- ・ 宮城大学：平岡、遠藤、吉川

関連調査

- 2015年4月、保呂羽神社祭礼調査（谷端、佐藤）
- 2017年2月、氏子青年会の活動（板谷、谷端）
- 2017年4月、保呂羽神社祭礼調査（谷端）

「記憶地図」の作成方法

聞き取りにおける主な質問項目

1. 祭礼や年中行事の運営方法、祭礼における行列のルート of 記憶
2. 祭礼とともにある場所・風景の「記憶」
3. 氏子の居住地区などコミュニティの広がり
4. 祭礼や神社と地域とのつながり
5. 震災後における祭礼の実態や神社と人々との関わりについて

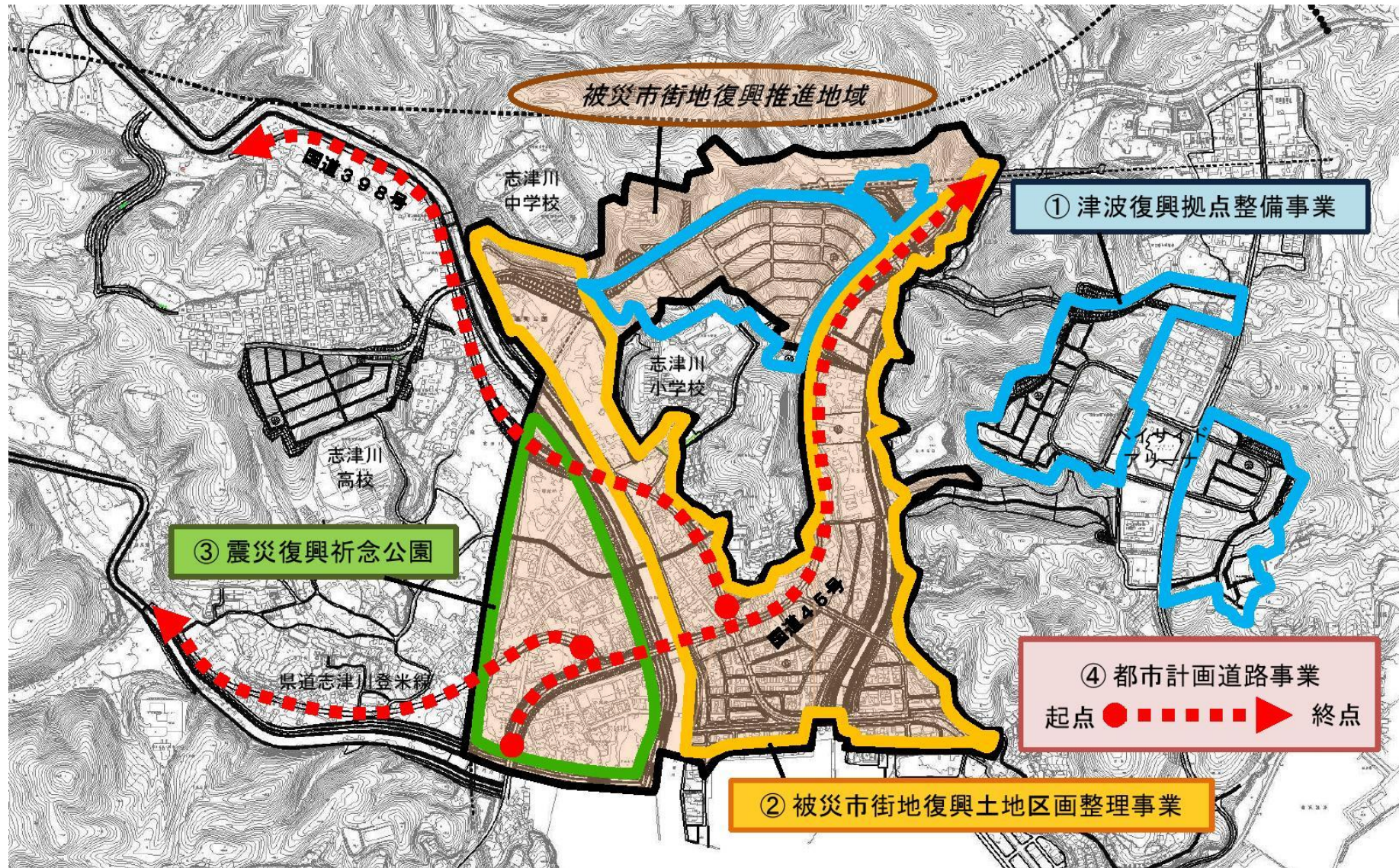
「記憶地図」の作成方法

- 聞き取り調査の際に、紙地図を広げながら場所に関わる情報が発話されると、地図上で確認し、その情報を書き込む作業を行った。
- 紙地図に書き込まれた空間情報をGISを利用してデジタル化、祭礼にまつわる「記憶地図」を作成した。
- 発話は音声を録音し、可能な限り文字データ化、「記憶地図」の情報と紐づけられるようにした。
- 作成された「記憶地図」は、上山八幡宮の工藤真弓さんに手渡し、社務所に保管されている。

志津川地区の被害

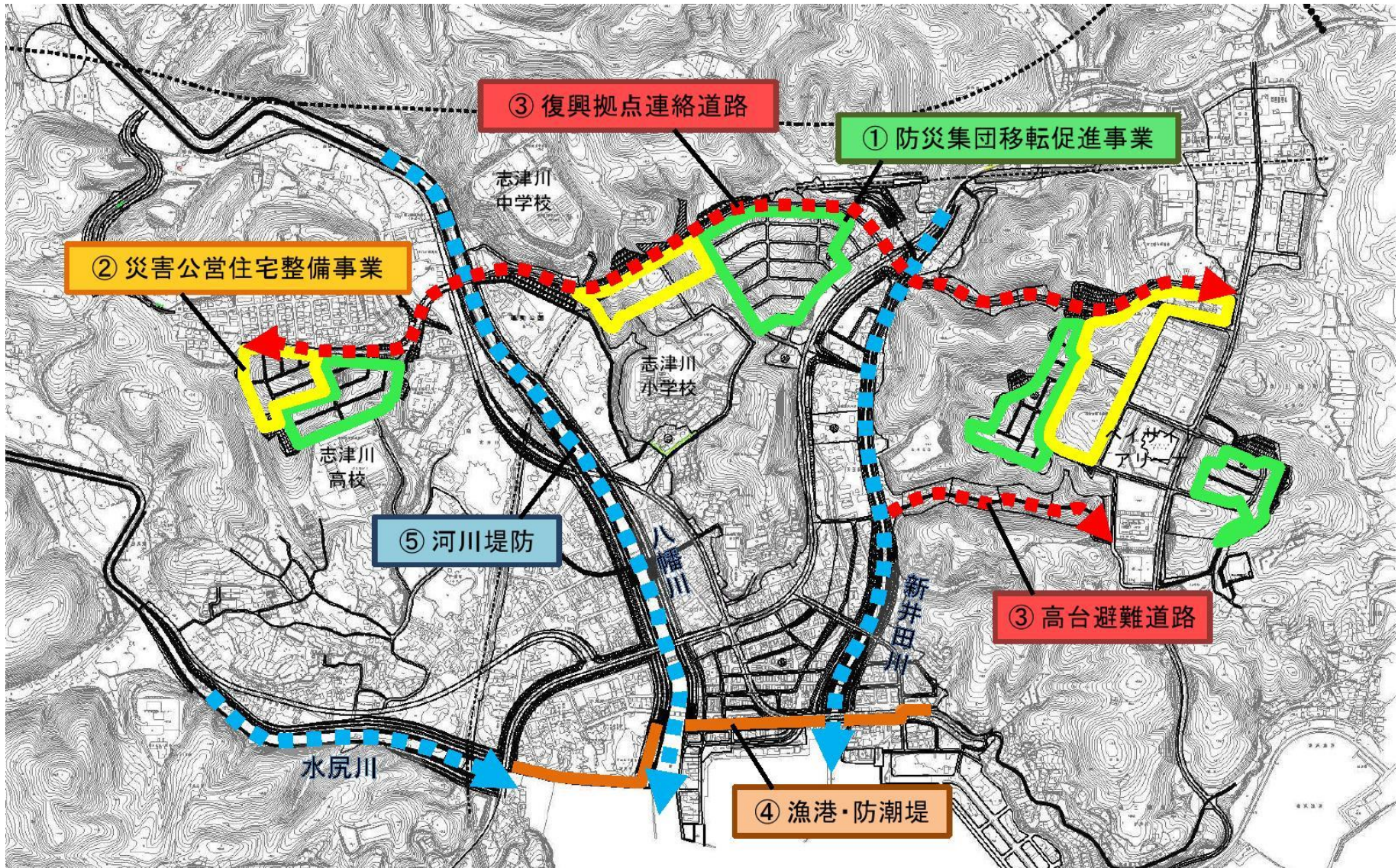
- 人的被害
- 死者**619**人
- 行方不明者**217**人（内）
- 住宅被害
- 全壊**3,143**戸（2011年2月末日現在の住民基本台帳世帯数の**58.6%**）
- 半壊・大規模半壊**178**戸（**3.3%**）
- 上山八幡宮や古峯神社など本殿の被害は少なかった
- 荒嶋神社の鳥居倒壊、参道被害

志津川地区の復興の概要



都市計画による事業（南三陸町のHPより）

志津川地区の復興の概要

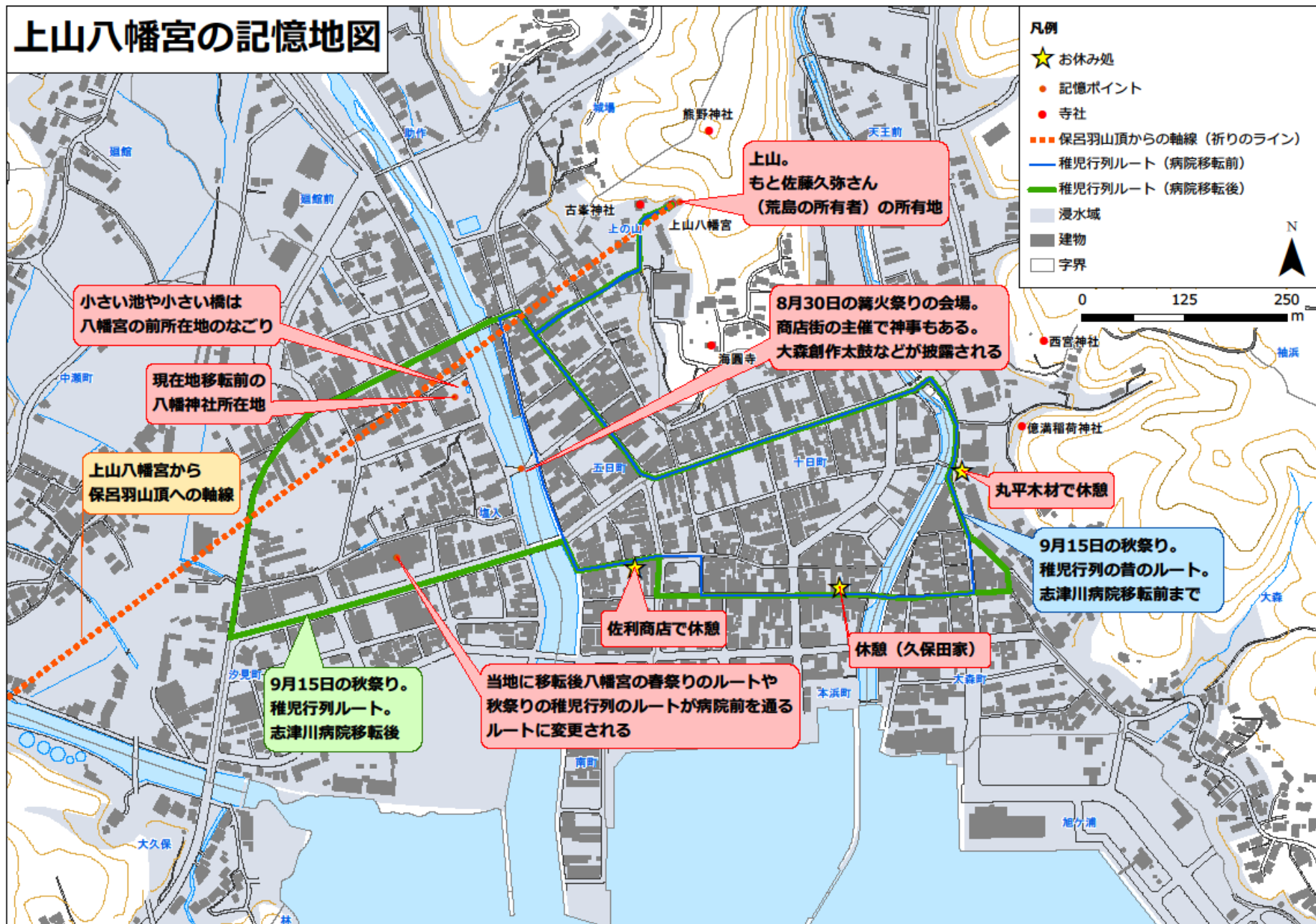


都市計画によらない事業（南三陸町のHPより）

記憶地図の分析

— 上山八幡宮を事例に —

上山八幡宮の記憶地図



「記憶地図」に描かれたもの

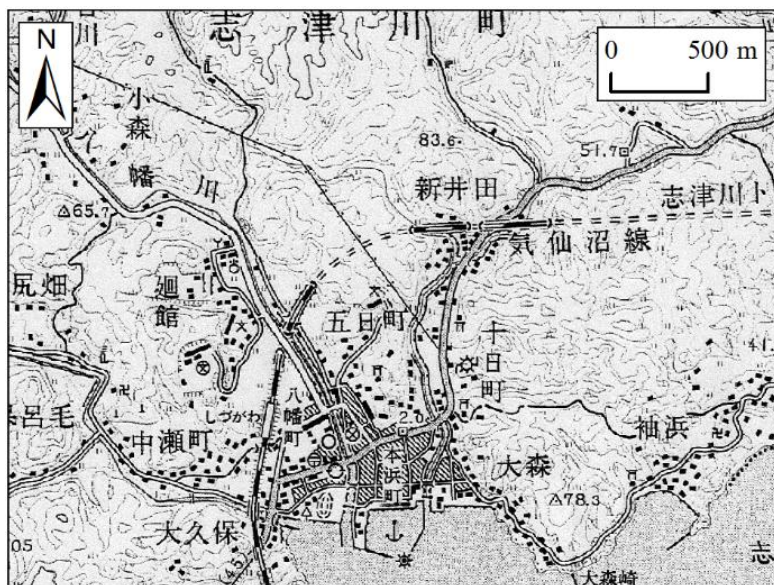
- 祭礼に関わる場所
- 神輿渡御のルート、ルートが選ばれた理由
- お休み場
- 同時に思い起こされる過去の景観



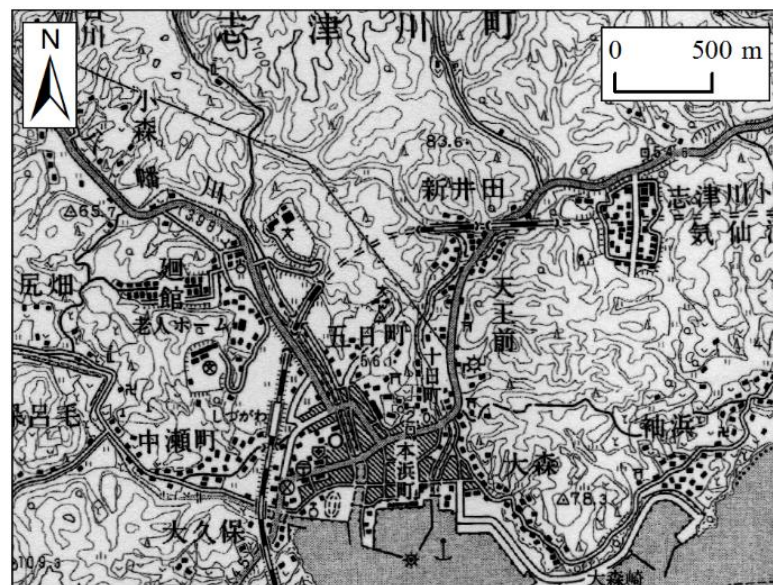
①大正2年



②昭和26年

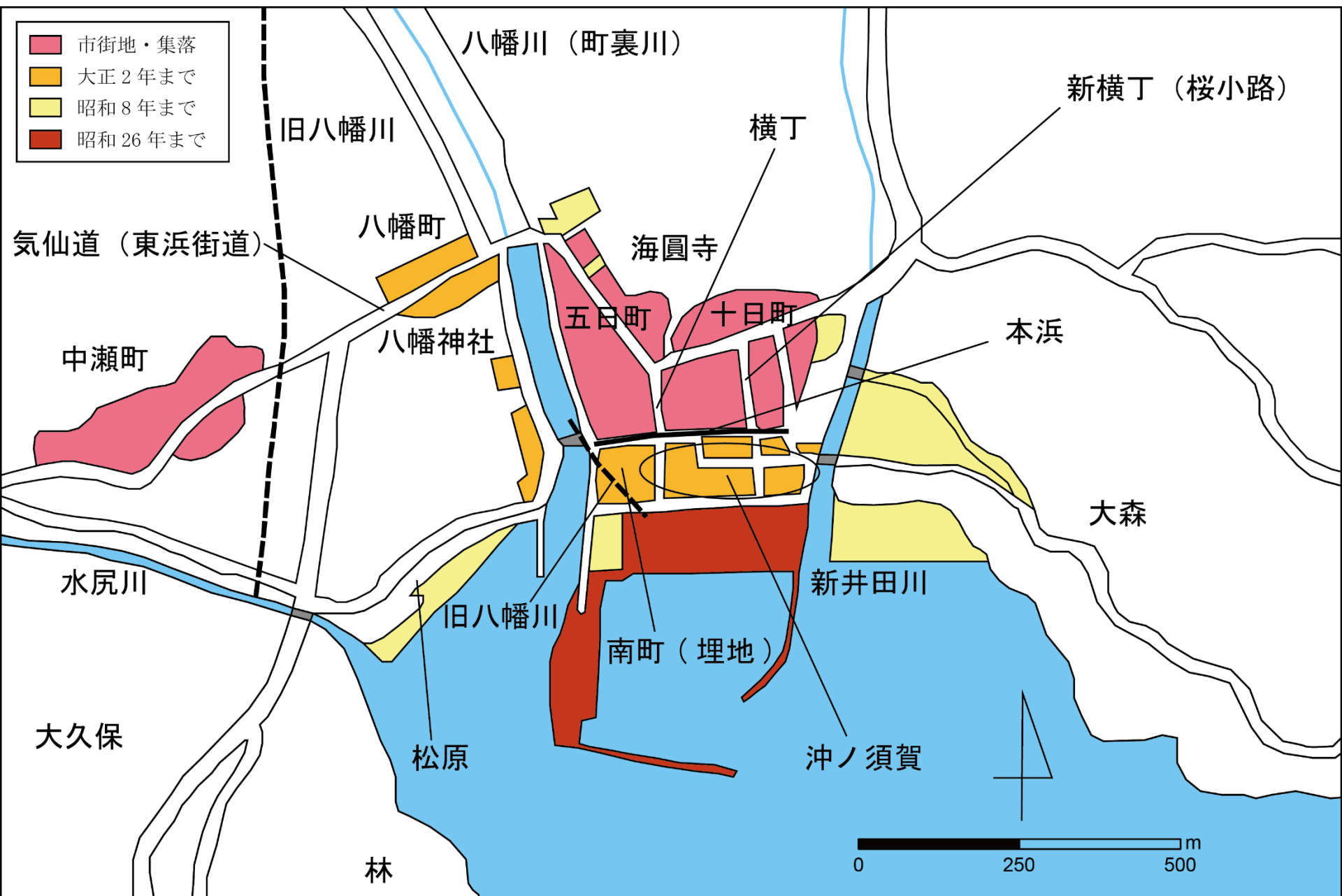


③昭和58年

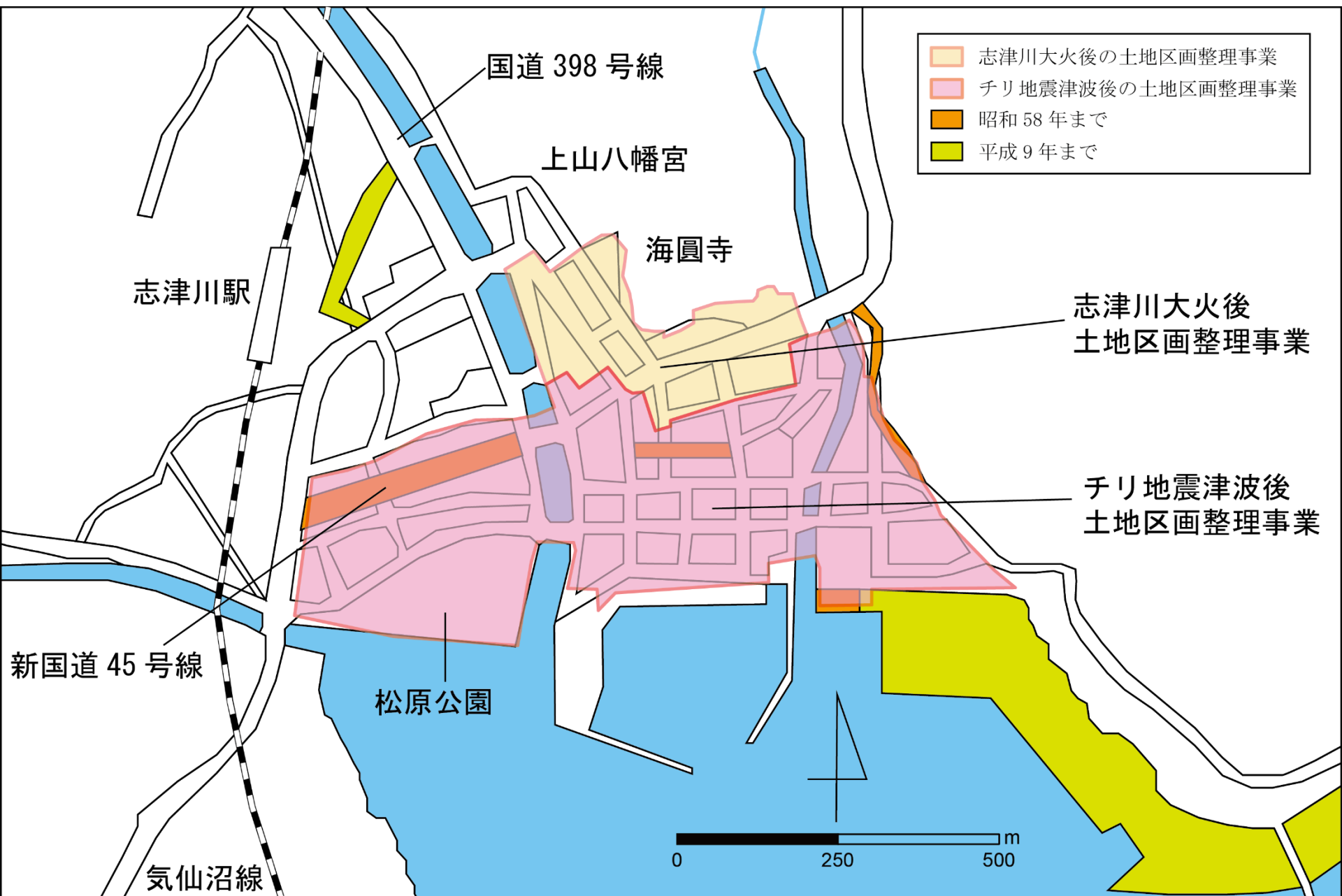


④平成9年

5万分の1地形図にみる志津川の変遷



戦後直後までの志津川



戦後の志津川

「記憶地図」に描かれた場所の意味

- もともとの市街地は八幡川左岸
- 町割りには、明治三陸地震津波、昭和の大火、チリ地震津波など災害対応の痕跡が認められる
- チリ地震津波後の復興事業や国鉄気仙沼線の開通により八幡川右岸にも市街地が拡大
- 八幡川左岸域→右岸にも拡大した祭礼ルートは、町の拡大と対応していたことが分かる

「記憶地図」の活用事例

—荒嶋神社と保呂羽神社の比較—

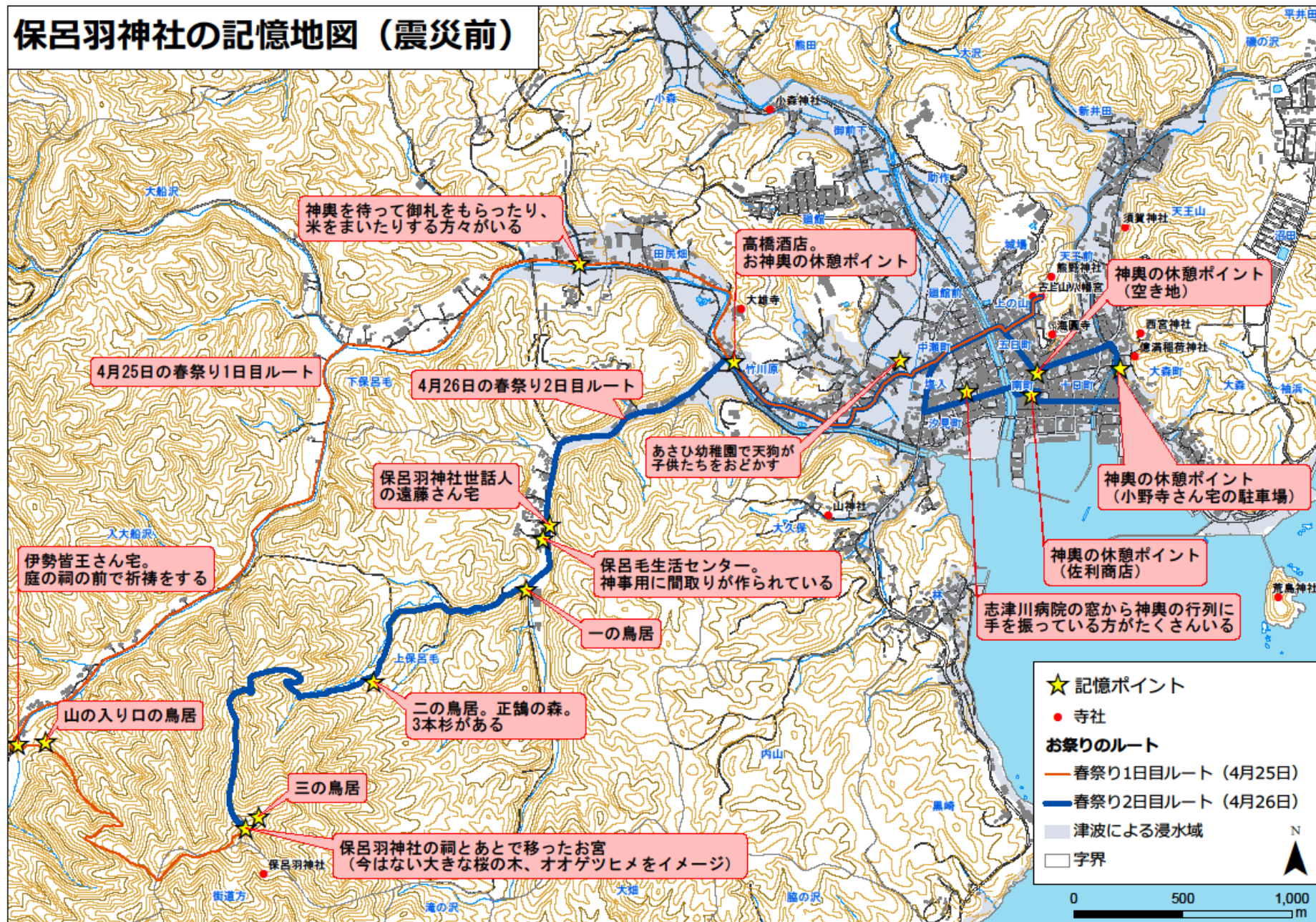
荒嶋神社

- チリ地震津波後の1961年創建
- 八大龍神、弁天宮などが合祀
- 7月25日例祭
- 海上渡御、七福神舞
- 漁業関係者
- 沿岸部に住む担い手の多くが被災
- 旧契約講の解散

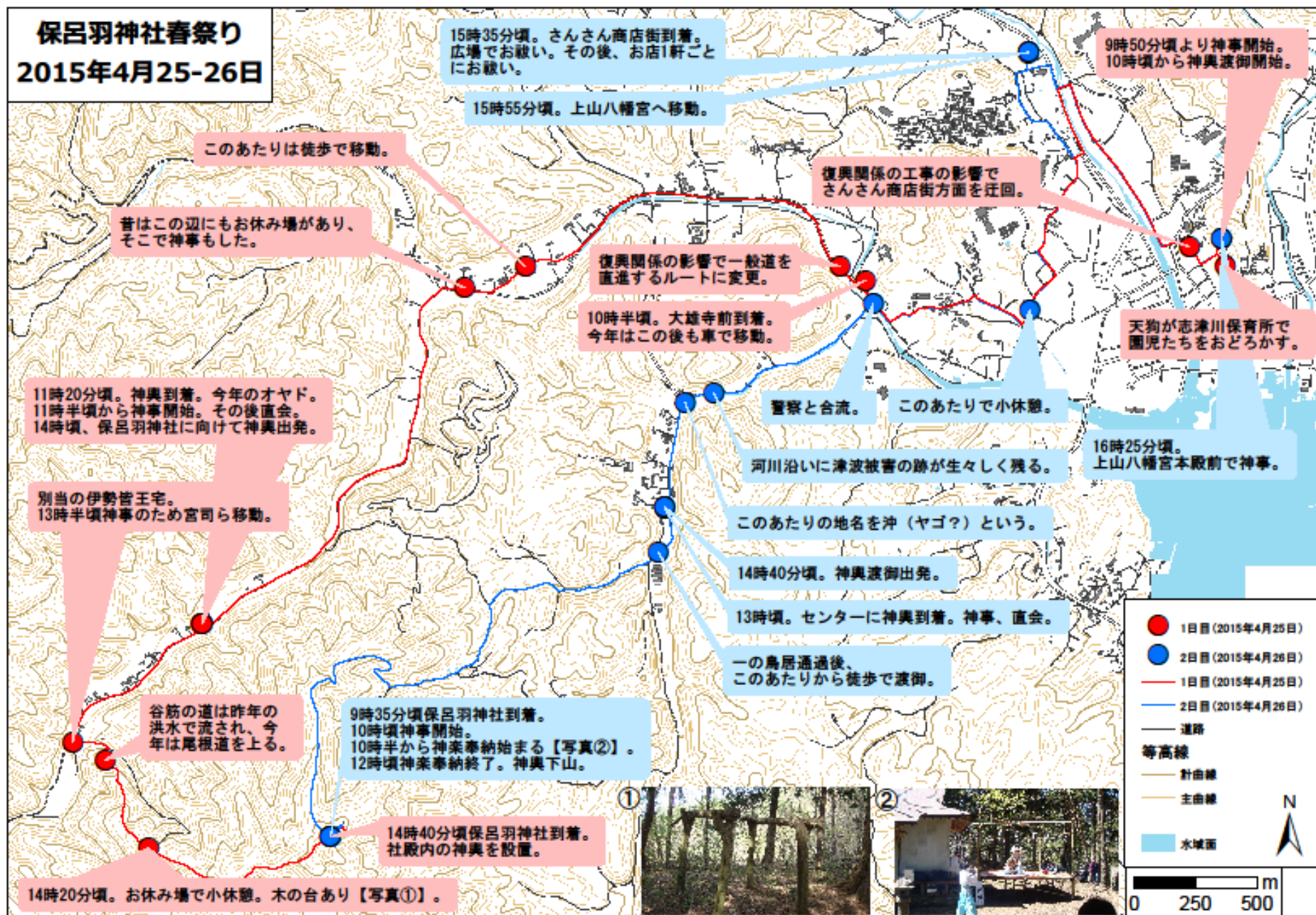
保呂羽神社

- 祭神はおほげつひめ、上山八幡宮のルーツでもある
- 4月26日例祭、25～26日神輿渡御、保呂羽山山頂で神楽奉納
- 山間部の集落
- 下流の一部が被災

保呂羽神社の記憶地図（震災前）



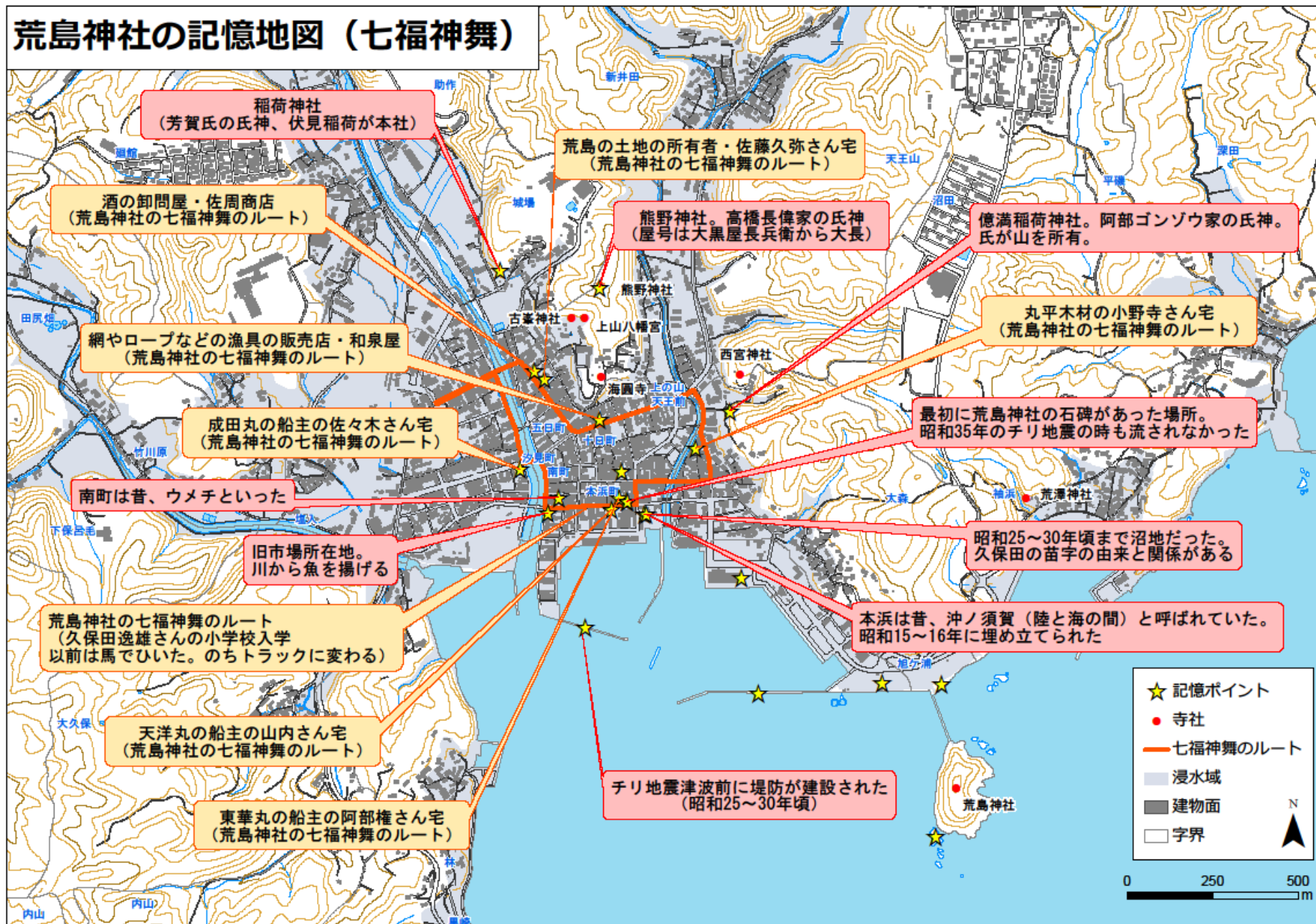
保呂羽神社春祭り 2015年4月25-26日



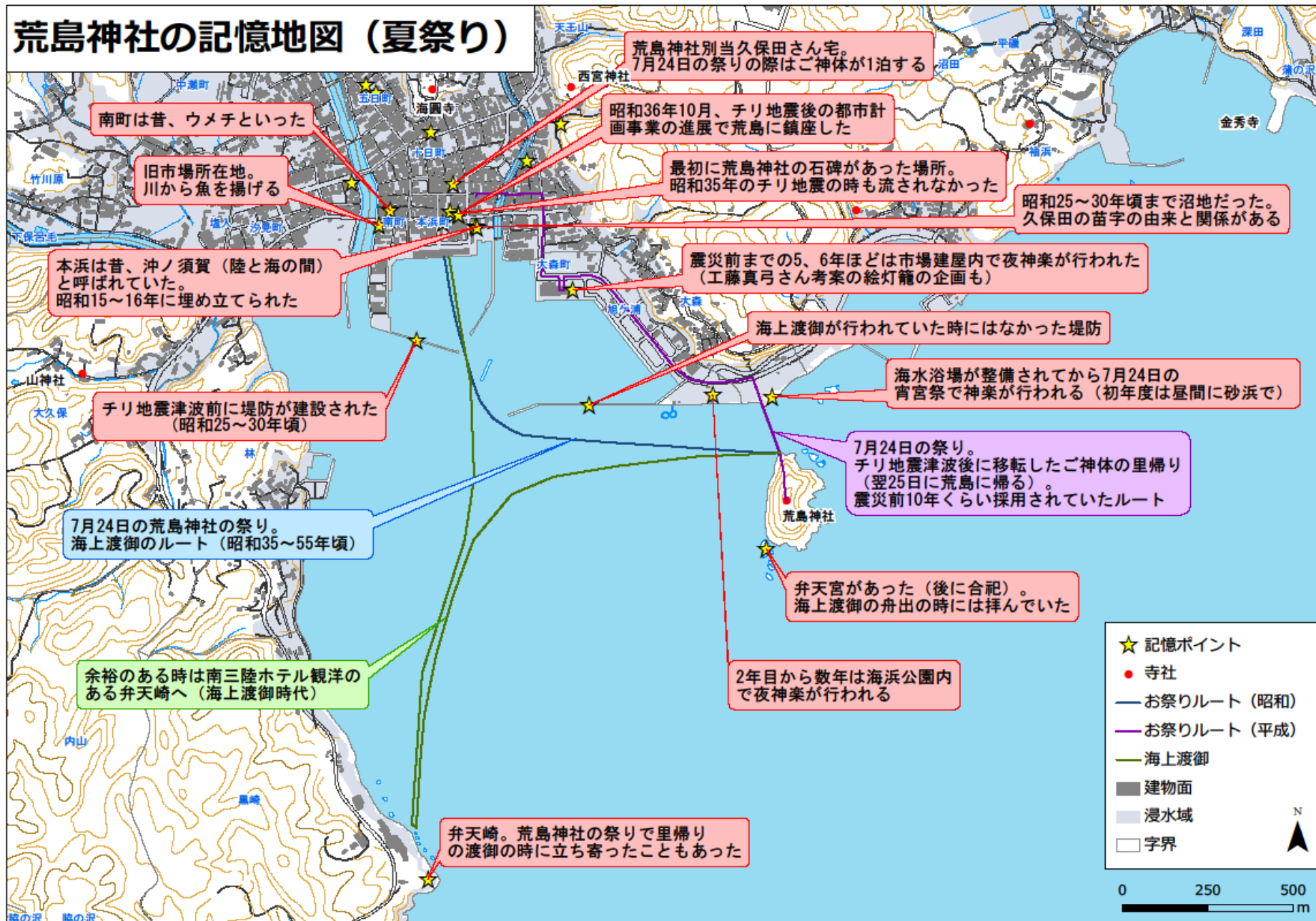
震災後の保呂羽神社の祭礼

- 震災の年は中止
- 2年目から復活、神輿のお休み場として、さんさん商店街を通るルートに変更
- 3年目は雨で神輿渡御中止
- 4年目はさんさん商店街で復興を祈願する催事を追加
→新たな意味づけ
- 今年（6年目）は、「氏子青年会」メンバーの参加が見られた。
- 氏子の高台移転先にもお神輿を渡御してほしいとの要望
- 現在、1日目の神輿渡御を担当する地区では、オヤドの慣習を見直す動きがみられる

荒島神社の記憶地図（七福神舞）



荒島神社の記憶地図（夏祭り）



荒嶋神社・七福神舞の再生

- 2016年1月、「氏子青年会」発足
- 毎月1回のペースで会合
- 第1回目は志津川地区の五社に関する知識の習得
- そこで「記憶地図」も活用された
→知識の継承ツール
- 7月25日の例祭日に本殿で七福神舞が奉納される
- 8～9月にかけて各種イベントで披露
- 七福神舞の再生→コミュニティの紐帯を取り戻す

知識の継承システムの変容

荒嶋神社

- 旧契約講の解散し、「経験による継承」が困難に
- 積み立てられた資金は地区の若者へ託される
- 「氏子青年会」による七福神舞の再生
- 七福神舞の再生は、コミュニティの紐帯を取り戻す契機に
- 七福神舞の踊りや衣装は子供の時の記憶が頼りにされた
- 第1回会合で祭礼の運営に関する知識の習得→「記憶地図」が活用される

保呂羽神社

- 震災前後で担い手に変化はなく、祭礼への参加を基本とする「経験による継承」が継続
- 今年から「氏子青年会」メンバーの参加。まずはお手伝いから
- オヤドの慣習を見直す動きがみられ、イエを単位とした継承システムに変化の兆しか

【まとめ】

「記憶地図」に描かれたもの

- 祭礼に関わる場所、神輿渡御のルートやお休み場、過去の景観に関わる情報
- GISベースによる「記憶地図」の作成
様々な地理空間情報と重ね合わせることができ、「記憶地図」に描かれた場所の意味を理解することができる。
- 場所の意味
たとえば、神輿渡御のルートは当時の街の広がりに対応していたことが分かった。
→柔軟に変化する場所とその意味

【まとめ】

知識の継承ツールとしての「記憶地図」

- 祭礼の担い手組織が震災により解散し、祭礼への参加を基本とする「経験による知識の継承」システムが断絶
- 七福神舞の復活の経緯から、「記憶地図」は復活を支える新たな組織に、祭礼に関する基本的な情報を提供する知識の継承ツールとして活用された。
- 「記憶地図」は、災害前の備えとしてこそ作成されるべきものではないか。

【おわりに】

持続可能な祭礼継承のあり方

- （場所について）最小限の決まり事、柔軟な意味づけ
- 記憶は知識継承の媒体
- 祭礼の持続的な継承を可能にしているのでは
- 阪神・淡路大震災後の神戸では、「地蔵の維持再生に人びとに共有された地蔵の記憶と柔軟に変化するが地蔵の意図づけが重要な役割を果たしていた」ことが確認されている（相澤2005）。
- 地蔵に限らず神社の祭礼でも、神輿渡御という基本線を維持しながら、意味づけを柔軟に変化させており、地域の文化遺産に共通する現象かもしれない。